

カルチャー・ショック 日本人のみた外国



(1983年、筆者撮影)



(2004年、筆者撮影)

タイム・スリップ後の中国再訪

石田正美

今から二一年前の一九八五年三月。筆者は、中国福建省の廈門（アモイ）で大学院最後の春休みを、三週間の語（遊）学研修で過ごした。

香港から東シナ海を船でテーブルのコツプが落ちるくらいまで揺られて約一晩、生まれて初めての「船酔い」を経験した後に、ようやく廈門港に着いた。そのときの光景は、現在の中国とは大よそ程遠いものであった。日本の湖などでみるオールが両側に付いたボートとは異なり、船尾に一つだけオールを付けた何艘もの木製手漕ぎボートがゆらりゆらりと回遊し、薄汚れた白い帆のジャンク船がみられた。陸では、緑豊かな丘がみえ、丘の頂上は岩肌が露出し、その光景は水墨画を思わせるものであった。自転車ばかりで、ほかには自動車はまったくみられない大通りを、運転手が我が物顔でクラクションを鳴らし続けて、廈門大学の外国人招待所まで乗せていってくれた。招待所では、毎日午前中は中国語の授業。日本の大学で中国語を教えておられる先生方も一緒に授業を受けたため、授業には落ちこぼれた。「白日依山尽、黄河入海流……」（白日山に依りて尽き、黄河海に入り……）と漢詩を読み、感想を尋ねられる。到底、私にはうまく答えられない。「有困

難？」（君には難しい？）と、先生に助けられていた。午後は、地元を視察、または地元の人との交流プログラムが用意されていて、それはそれで結構楽しかった。自由時間は、街を歩く。すると、「有外幣？」（外国兌換券は持っている？）と尋ねてくる。人目のつかない路地に入り、兌換券を渡すと、約一・八倍のレートで人民元が入手できた。そのお金で当時の中国のシンボルでもあった人民服（中山服）も購入した。

帰国の折りは、再び香港経由で帰ることであった。しかし、また東シナ海の船酔いに悩まされたくはないと思い、追加料金を支払って飛行機で広州へ、広州から深圳を経て、国際列車に乗って、香港に入った。深圳での列車の乗り換えも、当時は容易ではなかった。ただ、深圳では、廈門とは異なり、高層ビルの建設ラッシュがすでに始まっていた。しかし、街中からビルに遮られることなく遠方の山をみることでできた（左写真）。その後、一九八七年五月に連休を利用して、上海・蘇州・桂林を周遊、当時は上海でも人民服はまだ「健在」で、スリル感を味わいながら、自転車を避けて大通りをわたったのを記憶している。一九九〇年七月に仕事でマレーシアに赴任。そのときから、東南アジアとのつき合

いが始まり、一九九三年に研究所に入所。以来、ずっとインドネシアを担当、その間中国を訪れることはなかった。そうしたなか、二〇〇二年と二〇〇三年に二年連続で、北京・上海を訪問した。実に一五年のタイム・スリップである。その間、トイレを意味する「厕所」は「洗手间」になるなど、中国語の常用表現も少し変わったようである。人民服を着た人はみられず、大通りの主役は自転車から自動車になっていた。

そして、二〇〇四年一月に深圳を訪問。調査を終えて、タクシートの運転手に約二〇年前に撮った写真をみせ、わがままなノスタルジーに付き合ってもらうことにした。運転手はしばらく考え込んだ後、その場所を特定。確かにその場所に違いはなかった。だが、かつて遠方にみえた山はビルの谷間に遮られ、当時の面影はまったく感じられない（右写真）。逆に言えば、年平均一〇%を超える経済成長の賜物であろう。同年、二年のタイム・スリップの後、バンコクを訪ねたが、年当りの変貌振りは深圳のそれには及ぶまい。さて、かつてはじめて踏んだ中国の地「廈門」は、今どうなっているのか。機会があれば、ぜひ尋ねてみたい。（いしだ まさみ／アジア経済研究所開発研究センター）